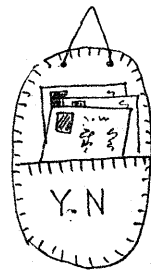


こすもす保育園見学日誌



竹田都志子

5月28日

私は、保專の新米教師である。付設保育園がないので、乳幼児心理学などと、ふりかぶって教えてはいるが、子どもたちの年齢、月齢すらはつきり当てられない。

これはいけないと思って、おそるおそる、ある保育園の門をくぐった。あき時間を利用して見学させてもらおうと思ったのである。

……そこには、こすもす保育園と、ひらがなで書かれた白い標札がかけてあった、コスモスでなく、こすもす、とひらがなというの、何か柔らかい、ふんわりした感触を私に与えてくれた。

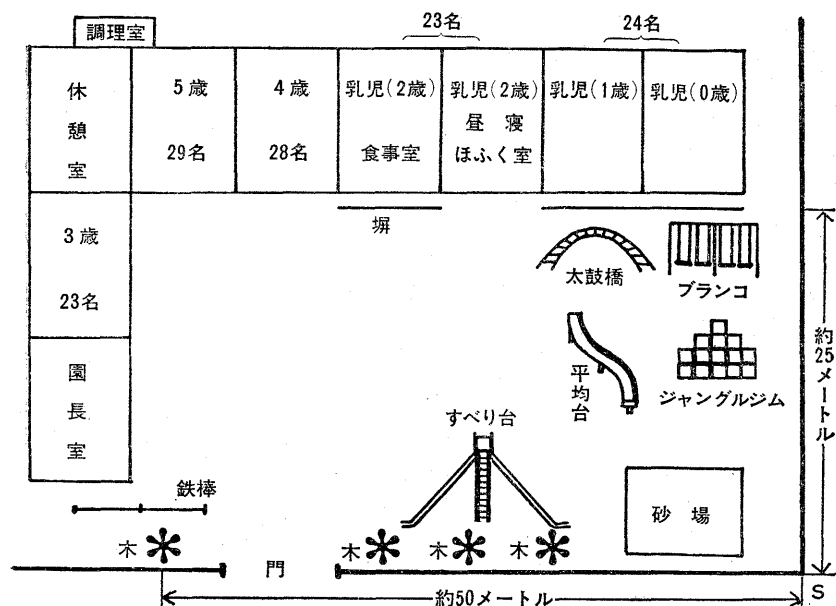
「あのー、すみません、Tさんに紹介されてM主任さんに会いに来た者ですがあ」

「この奥の部屋ですよ」

会えた、会えた。主任さんは、ジーパンスタイルも活発な30代の方であった。

……「このごろは、保專の卒業生は、私立へは来てくれない。また、乳児保育を長時間やっていて、これでいいのかなあと疑問を感じますよ」等々、口角泡をとばすというか、元気に、気さくに、ボンボンボンボン、日ごろたまっていた疑問を、機関銃のように話してくださった。そして保專の教師だが、なまの子どもたちを知りたいので、見学させていただきたいという旨を伝えて最初の日は帰った。

園舎は長方形の広い園庭に「の」字型に建った平屋の木造の建物であった。



6月4日

見学できるようになるかなと心配しながら、門をくぐった。

「今日は、主任さん市役所へ寄ってくるので遅くなりますよ。」

見学の方ですね。どうぞこちらで待っててください」明るい保育士さんに接して少し不安が消える。

でも、やがて主任さんがみえ、更に園長と対して聞くことになった返事は、ちよびりだけど厳しいものであった。私の仕事は専任の教師ということで、自分の保育を見られるのがいやという保育さんと、見られてもいいという保育士さんがいて、全体をうまくまとめた園長としては、

① 自由遊びの間だけ

② 子どもに自分から話しかけない。話しかけられた時は応じてもいい。

というものであった。私は承諾した、いや見学させてもらうこちらが承諾したというのは変かもしれない。

園長は優しいような、色白の中年のちょっと太った女の人で、主任さんは今日も気さくに話しておられた。要するにいやだという人がいることを尊重したいということなのだが、それはそうだと思った。私がいくら力不足でも職名を聞けば、自分の保育を見られるようで保育士はいやだろうなと思って黙って帰った。

6月11日 雨

登園風景より

母A「ほら、くつ、ここよ。XXちゃん、ここよ。ほら、傘、ここよ。XXちゃん、ここよ」と入れてあげて叫んでる母。子は母の声に、あまり見向きももしないで、保育室にごく普通の速さで入っていく。

母B 子どもが整理し終わるのを見守っている。終わったところで、「じゃあね」と言って帰る。子はもう保育室に入るのが夢中で母に挨拶もしない。

母C「XXちゃん、ここよ」と傘を入れてやる。子どもは見えない。くつは子どもが自分でしまつて保育室へかけこむ。

たった数分間の雨の日の玄関先なのに、おもしろい光景に出会うものだと思った。母親の養育態度の違いと子どもの保育室への反応の違いがおもしろかった。

6月18日 晴

ブランコ

元気そうなA男。ブランコにのって、もう一方の(横の)ブランコも手に持ってゆすっている。誰ものせないためか、それとも、変わったのり方がおもしろいためか。隣の二つのブランコ

でも、やはり同じように、もう一方を手を持ってゆすり始めた。

やがて女の子が来て、男の子が手に持っていた方のブランコを受けとり、仰向けにぶら下がって、くるくるくるとブランコをまいてはほどく遊びを始めた。横では男の子が前後にゆすっている。

私は危いなあと思つたけれど、保母さんたちが何も言わないのだからと黙っていた。やがて二人のブランコ遊びは終わる。ケガも何もない。ぶつかってコブができるくらいのことを認めて遊ばせない、のびのびしないのかもしれないと思つた。

6月25日 晴

視診

連れてきた子どもについて、母親が保母さんと話をしている。いつかの雨の日はそんなことはないようであつたが、今日は何人も、保母と話している。雨の日は早く来た子どもの世話に忙しかつたのかもしれない。

遊具の使いこなし

友だちと遊動ブランコにのっていた五歳位の男の子が、動くブランコを足場にして、天棚に登る。上で立つ。やがて支えの棒を伝わっておりてくる。固定円木はないけど、子どもたちが実に創造的に、現在ある遊具を使いこなしているのが目につく。すべり

台では、一番上の、手をかけるところに両手で宙にぶらさがってから、すべり台におしりをぶつけてすべりおりてくる。

ある女の子はたいこ橋で、つり輪のように、二カ所をにぎり仰向けにそり、足を横棒にかけて空を向いている。何人もが、遊具を創造的に使っている。

ケンカ

つかみあって倒され、泣き出す四歳位の子。どの保母もかまわない。子どもは泣いている。やがて泣かせた子が「ゴメンネ、ゴメンネ、許してね」と肩をたたいていう。と、泣きやむ。

またケンカ、やはり誰も相手にしない。やがて泣かした子とは関係ないある子が何かいいかけたら泣きやむ。

こんどは五、六歳児。〇歳児からいるこの園では、五、六歳児は実に大きくなったのもしく見える。男の子が二人つかみ合いを始めたが、体格のよい女の子が二人、中にわり入って「やめな、やめな」というとおさまる。

保母は何もいわないけれど、子ども同志で決着がついている。これは、この園では実にいいものがあると思っている。

7月9日 晴

泣き

大きい子は泣いても放っておく、自分で泣きやんでいる方針のようであった。しかし一歳児がトコトコ出てきて庭で泣いた時、園舎の中からすぐ保母さんが出てきて抱いて入った。保母さんは、泣き声だけで、その子の名前がわかってとんできた。

7月18日 曇

実にみなが元気に遊んでいる。鉄棒に必死に挑戦する子。ジャングルジムでは、一人がてっぺんに登れば、もう五、六人がてっぺんに立っている。身長は三倍ほどの高さがあるのか。

下駄箱に実にはキチンと上靴が並んでいる。バラバラに並んでいる隣のクラスの保母さんが出てきて、「うちのクラスはこうだ」とくっつくなく笑う。「むこうは一番年長なんです」と言う。「はい、年長でもあるし、先生がきちつとしてる人だもんで」と答えてくれた。個々の先生の主体性が実現しているんだなと思った。

「実に、いつも元気よく遊んでますねエ。ケンカなんか自分たちで解決して」と問うと「はい。先生のところに言いに行っても『そんなちっちゃなこと自分たちで解決しな』とおこられるもので。でも、ケガなんかするケンカは、どうしても保母が入らなきゃいけないですけどね」と答えてくれた。

いつのまにか、保母さんたちがいっぱい外へ出てきた。遊動ブランコで泣かされてる子どもに、保母が二人近づくと、やっぱり近くにいるとつい口が入るのであろうか、さほど小さい子どもでもなかった。

雨が降ってきた。「ほら雨よ！ 中に入んなくちゃ」……私も辞退した。

7月23日 曇

あの元気な女の子！ 男の子に泣かされても歯をくいしばってた女の子が、少しおつむが足りないのだという。いじらしい気がした。

もう慣れてきて、人なつっこい男の子が、また「おーばちゃん」と言いにくる。最初に私を見て「バカッ」と言った女の子も、ベンチにすわっていると背中にすり寄ってくる。「バカッ」と言われたと教えただけで、保母さんは「たか子ちゃんも人なつっこいからね」と真意がわかった。子どもの関心、親愛の情など、いろいろな形で現れるのだなと勉強した。そういえば数年前出会った知人の二歳の女の子は、くつのボタンをとめてくれというのが親愛の情だった。

はだし（裸足）

二歳は、はだしにすぐなるといふ。保母さんは、一人一人の靴をさがしてくるのに大変だといふ。特に砂場で、はだしになるといふ。芝生の上でも、足をちぢめて、素足を地につけない都会の子どもに比べ、まだまだ、自然に触れている保育がなされているとうれしかった。

現実と理論は近寄りたく、毎日世話に追われると、一人の保母さんが嘆いて語る。

また年長児のみどり組は固まって遊ぶと言う。集団遊びは……と頭から先に保母になったような人でなく、素直に観察して発見している姿が、尊いと思った。

8月1日 晴

郵便局に寄ったので九時ごろ着く。この暑いのに園服を着て……と思ったら、私服のランニング姿で遊んでいる子もいる。何人か、希望したらぬがせるのであろうか。

やがて海水パンツ一つの男の子がやってきて、私のすぐ前の塀に登る。女の子も木綿の黄色いパンツでやってきた。大きく名前が書いてある。アラアラ、次から次から、おそろいの黄色いパンツがやってくる。

富士宮市の野中保育園の、抑圧から解放させるといふハダカン

が保育が思い出される、なるほど、パンツ一つになった子は、プール遊びの期待もあつてか、並んで走ったり、塀に登ったり、うれしさと解放感でいっぱいだった。

6月10日 曇

八時三十二分ごろ着くと、外で遊んでいるのは一グループだけ。少し知恵遅れと聞いたA子ちゃんも加わって、五、六人で川ごっこしている。このところ台風の影響で、堤防決壊などが、あいついでいるせいか、堤防に水をためて遊んでいた。

砂場でなく遊戯場の泥で、くねくねと堤防をつくっている。私が行った時は、ほとんど出来上がり水も入っていた。私が行ったからは一ヵ所増築(?)し……(一ヵ所破いて延ばすかと思つたら、水がこぼれないよう、増築部分が出来上がりてから境をくずした)子分役の子どもが、古やかんや、びんに水を三、四回汲みに行っては川(?)の中に水を入れる。入れる手元が不器用で堤防に水をかけてこわす。兄貴分が修理する。

私が見た以上のことで二十分近く遊んでいた。着いた時は、もう川はほとんど出来上がりていたし、水も入っていたので、何分ほど遊んだらうか。

やがて一人欠け、二人欠けして、中には泥でおだんご作りも始

まり、活発でいたずらな男の子が、水たまりに砂を降らせて「雨だ」とやったり、靴のままじゃぶじゃぶ入ったり、ついに三輪車がでてきて堤防の真上を行ったり来たりして半ばこわしてしまつた。というよりこわす遊びに発展してしまつた。知恵遅れといったA子ちゃんが一人残つて、器でおだんごやホットケーキを作っているだけになった。

9月17日 雨ときどきやみながら

昨夜から雨。まだ小雨が残っている。傘をさして園に入る。今日は雨だから、朝の見送り風景を見るつもりだったが……門を入ると、いたいた、三歳児クラスの女の子と男の子が、たまり水で、ミニカーを洗うように走らせている。わりと深く、きれいな水がたまっている水たまり。しばらくそうして遊んでいる。一人園児が登園してきた。見送りのお母さんが水遊びを見つけて「わー、きたない。先生に叱られるよ」と言いながら通りすぎる。

夢中な水遊び、大好きな水遊び、させてやりたい、でもきたないのはとにかく、破傷風にでもなるといわれると返す言葉がない。そのうち雨がまた降ってきた。主任さんが「雨降ってんじゃない、やめなあー」といって、通りすぎる。やがて受持の先生がやってきて、「おこられた方がいいのー」というとさっさとやめる。

さすが。

人なつっこく若いその先生は、私に「どうぞ中に入って遊んでください」という。誘われて、初めて保育室の中に入った。三歳児は一番いたずら坊主のような顔していても、すーと膝の上にくる。二、三人の男の子がかわるがわる抱きつく。背中からものぼってくる。「抱いたりしていいのかな」と園の方針に不安だったのが、とびつくままに両手で、抱きしめてやる。よく聞きとれない言葉ながら、一生懸命友だちの話を私にする子。やがてかごめかごめをしようということになり、あぶくたつたにえたつたになり、ふるさとまとめて花いちもんめになる。終りごろ気がついて壁にもたれている女の子に手をのばすと、すっと入ってくる。ああ、気がつかなかったと思う。

もう何分たったかしらと思って腕時計を見るとたったの五分！花いちもんめも終わって、また二人の男の子が、かわるがわる抱きついてくる。足から登ってきて、抱き上げると喜ぶ。三歳児はまだスキップを豊富に求めているのだろうか。腕時計を見る。また五分しかたつてない！

いわば無理して、いいとこみせてる私は、くたびれてくる。保育さんの重労働が身にしみてわかった。一緒に遊んだりしないで、危い遊びをとめたりする口の保育は楽である。

そんなこと思っているとき、一人の男の子が鼻を鳴らしてくる。「うんちゅ」ときくと「おしっこ」という。さあ、三歳児だから、ズボンはおろさないでいいだろうと思っていると、一人元氣な男の子が助け舟を出して、「トイレはこちらだよ」という。泣きべソの男の子は走って行って、私が追いついた時は、もう、ちゃんと男児用のトイレで用を足している。ちょっと奥まったところにあるから、こわかったのであろうか。

若い受持の先生も調理室から帰ってきて、「さあ、一緒にお絵かきしようかあ」と、初めて主題活動まで誘ってくれた。が、時間だったので、またの機会にと約束して辞退する。

抱っこ抱っこせめに会ったわんぱくたちが、私の手さげを見つけて持ってきたり、ぬいだスリッパをしまいにしたりする。そして、口々に「また、あした来てね」と叫ぶ。うれしかった、そしてかわいかった。これが保育さんの喜び、支えかしらと思った。

(静岡県立厚生保育専門学院)